

日本における Translanguaging 研究の動向調査

— 『日本語教育』・ *JALT Journal* ・ 『社会言語学』

における会話データ分析論文から—

竹田らら (昭和女子大学) 大場美和子 (昭和女子大学)
山本綾 (東洋大学) 松橋由佳 (テンプル大学ジャパンキャンパス)

1. 研究の目的

実際のやりとりを収録・文字化してその特徴を記述し、言語教育に還元する枠組みとして、会話データ分析 (中井, 2012) がある。第二言語・外国語学習者を対象とした会話データ分析では、目標言語を使用した母語話者と学習者とのやりとりや、多様な背景を持つ学習者間での複数言語によるコードスイッチング (CS) などが研究され、様々な知見が蓄積されている。近年、会話で複数言語が用いられる現象については、多言語・多文化共生が浸透している国・地域を中心に、トランスランゲージング (TL) として捉え直されている。TL とは、コミュニケーションの場で手持ちの言語レパートリーやツールを動的・一体的に駆使することを指す (Canagarajah, 2011; Wei, 2022)。この現在の情勢を踏まえ、日本においても従来の研究成果を TL の観点から見直し、今後 TL の実態調査を進めるための基礎資料を得たい。

そこで本発表では、日本で刊行されており、かつ、言語教育に関する実証・理論的研究を収録した論文集から会話データ分析を扱った論文を取り上げ、TL の観点から文献調査を行う。具体的には、日本語教育および英語教育から『日本語教育』と *JALT Journal*、両言語を含めた多様な言語の研究を扱う『社会言語科学』の計3誌を対象に、研究動向を把握する。

2. 先行研究

ある言語から別の言語への変化のプロセスに焦点を当てる CS に対し、TL は、言語間の関係をよりダイナミックに捉え、多言語話者がどのように言語レパートリーを構成するのかという視点をとっている。すなわち、TL では、ある言語で話していた最中に別の言語が登場したその事実に着目し、それでコミュニケーションがどのように進んでいくかという「会話全体のプロセス」により重きが置かれている (Tsou, 2021:10-11)。

TL は、元々、教室での二言語使用状況を表す術語 (Mazak, 2017) である。これまでに、アジア、アフリカ、欧米の高等教育における教員や学習者による TL の実態 (Tsou & Baker [eds.], 2021; Bojsen, Daryai-Hansen, Holmen, & Risager [eds.], 2023)、二言語使用学習者のための TL を活用した教室指導 (García, Johnson, & Seltzer, 2016; Heltai & Tarsoly [eds.], 2023)、TL を用いた教室指導の可能性と文脈に即した TL のデザイン (Shepard-Carey & Tian [eds.], 2023) などについて、観察や実践報告、問題提起がなされている。

会話データ分析論文については、大場他 (2014) が、学会誌『日本語教育』における掲載論文を対象に、年代別動向調査を行っている。この結果、各時代の背景に応じた研究が行われてきていることを指摘している。すなわち、当該研究によれば、学習者の急減な増加により、1980年代から接触場面の自然談話を対象にした会話データ分析論文が増えたが、その後の学習者の就労・学習・生活などの多様化を受けて、特定の学習者や現象に着目した研究が行われるようになってきた。このように、複数言語使用も社会の変化を反映して論文に記述され、日本語・英語教育でも同様であろうと予測される。

3. 調査の概要

調査では、上述の3誌 (『日本語教育』, *JALT Journal*, 『社会言語科学』) における掲載論文を対象にした。なかでも、他者とのやりとりを遂行する際に起こる言語レパートリーの変化を顕在化させた研究を見るべく、複数言語の現象を記述した会話データ分析論文の認定を行った。

以下、調査対象の3誌を概説する。はじめに、『日本語教育』は、日本語教育学会の学会誌で、60年以上にわたって日本語教育に関連する知見を収める形で情報発信を行ってきている論文集である。次に、*JALT Journal* は、全国語学教育学会 (The

Japan Association for Language Teaching) の学会誌で、英語指導と学習の向上に関連する研究を集めた論文集である。そして、『社会言語科学』は、社会言語科学会の学会誌で、「ことばと社会の関係」を切り口にし、日本語教育や英語教育にも還元されうる論考を含めて、広く社会言語学の研究を扱っている論文集である。

調査の手順は、以下の通りである。はじめに、3誌において、明らかに論文ではないもの(学会の大会報告、会計報告、書評など)を除いた論述を「掲載論文」として認定した。次に、この掲載論文から、中井(2012)、大場他(2014)に従い、会話データ分析を扱っている「会話データ分析論文」を認定した。具体的には、分析データの種類や収集方法は異なっても、「文の単位を越える二発話以上連続したまとまりのある単位からなる話し言葉を分析データとして、談話レベルの会話の現象を記述している論文」(大場他, 2014: 49)を対象とした。

表1は、対象となる3誌の概要と、認定した掲載論文数、会話データ分析論文数をまとめたものである。

表1 対象学会誌の概要・掲載論文数・会話データ分析論文数

学会誌名	学会名	出版年	対象号	冊数	掲載論文数	会話データ分析論文
『日本語教育』	日本語教育学会	1962-2023	創刊号-185号	185冊	1,703本	248本
<i>JALT Journal</i>	The Japan Association for Language Teaching	1979-2023	1.1-45.1	82冊	403本	38本
『社会言語科学』	社会言語科学会	1998-2023	1(1)-24(2)	48冊	429本	201本

本発表では、上表の3誌(合計315冊、掲載論文数総計2,535本)より抽出した487本の会話データ分析論文を対象に分析を行う。

4. 分析

調査では、3誌について共通の分析項目を設定し、4.1で量的構成、4.2で各誌の特徴を分析した。具体的には、量的把握にあたっては、「(1)掲載論文」中の「(2)会話データ分析論文」の中で、「(3)複数言語使用の現象が観察される論文」と、「(4)CS・TLに言及があった論文」を認定した。一方、各論文の検討にあたっては、「(3)複数言語使用の現象が観察された論文」について、後述の5つの共通項目からその特徴を探った。

4.1 量的構成

表2は、対象となる3誌における「(1)掲載論文数」、そのうち「(2)会話データ分析論文」、「(3)複数言語使用の現象を観察した論文」、「(4)CS・TLに言及した論文」として認定した数とその割合を百分率にて計算した結果である。ここで、各百分率は「(2)会話データ分析論文」は「(1)掲載論文数」を、「(3)複数言語使用の現象を観察した論文」は「(2)会話データ分析論文数」を、「(4)CS・TLに言及した論文」は「(3)複数言語使用の現象を観察した論文」数を分母に算出している。

表2 対象論文の概要

学会誌名	(1)掲載論文数	(2)会話データ分析論文	(3)複数言語使用の現象	(4)CS・TLへの言及
『日本語教育』	1,703本	248本(14.6%)	23本(9.2%)	0本(0.0%)
<i>JALT Journal</i>	403本	38本(9.4%)	15本(39.5%)	7本(46.7%)
『社会言語科学』	429本	201本(46.9%)	21本(10.4%)	7本(33.3%)

この表2から、『日本語教育』や*JALT Journal*では、「(1)掲載論文数」に占める「(2)会話データ分析論文」の割合が2割に満たなかったが、『社会言語科学』は、掲載論文数の半数近く(46.9%)を「(2)会話データ分析論文」が占めていたことがわかる。

他方で、「(2)会話データ分析論文」の中で「(3)複数言語使用の現象を観察した論文」数の割合を見ると、「(2)会話データ分析論文」数の割合が最も低かった*JALT Journal*で最も高い掲載率(39.5%)である。これは、『日本語教育』(9.2%)や『社会言語科学』(10.4%)の約4倍であったことがわかる。

さらに、「(4)CS・TLに言及した論文」について、『日本語教育』で全く掲載がなかった一方で、*JALT Journal*や『社会言語科学』では、複数言語使用の現象を扱った論文数の3割(『社会言語科学』33.3%)から4割(*JALT Journal* 46.7%)の割合で掲載されていた。

次節では、表2で示した結果に基づき、認定した論文について詳しく見ていく。

4.2 各誌の特徴

表2で示された傾向を掘り下げるべく、本節では、『日本語教育』、*JALT Journal*、『社会言語科学』の順番で、前述の表2の「(3)複数言語使用の現象を観察した論文」について、「①対象の場面」、「②使用言語」、「③参加者の関係」、「④参加者の属性」、「⑤CS・TLの言及」の観点からその特徴をまとめた。ここで、「①対象の場面」は、教育に関わる場面か否かで分類した。そして、「②使用言語」は、論文中のデータで使用されていた言語を見た。また、「③参加者の関係」は、教育に関わる場面(学習者同士、教師と学習者、その両者)と教育以外の場面(初対面、友人など)の関係で、「④参加者の属性」は、成人か年少者(18歳未満)かで大別した。「⑤CS・TLの言及」は、論文中でなされている記述の傾向を見た。

4.2.1 『日本語教育』に見られる特徴

複数言語使用の論文数は23本で、その「①対象の場面」の大多数(19本)が授業や支援活動などの教育に関わる場면을扱ったものだった。「②使用言語」は、単語や単文レベルで偶発的に使用される表現も含め、「日本語と英語」が12本で最も多く、「日本語と中国語」が6本、「日本語とカザフ語」が1本、「日本語と韓国語」が1本あった。その他、3つ以上の言語による会話データ分析論文として、「日本語・モンゴル語・英語」「日本語・シンハラ語・英語」「日本語・英語・中国語」「日本語・英語・北京語・広東語」が各1本あった。「③参加者の関係」は、教育に関わる場面で「学習者同士」が7本、「教師と学習者」が4本、「学習者同士」と「教師と学習者」を同時に見ているものが5本あり、「初対面間」が2本、「友人間」が1本あった。「④参加者の属性」では「成人」が14本と最も多い中、「年少者のみ」が7本、「成人と年少者」が2本あった。さらに「⑤CS・TLの言及」については、現象として存在しながらも、CS・TLに言及した論文は1本もなかった。ただ、論文中の会話例には、日本語の教室場面で、「学習者同士」もしくは「教師と学習者」が互いにわかる言語を使用して、その意味を確認する際にTLの現象が記述された事例が観察された。

この『日本語教育』に掲載された複数言語使用の論文の特徴として、まず、年少者を分析対象にした研究が比較的多いことが挙げられる。そして、母語使用による現象や母文化の影響に着目した論文6本のうち、4本が年少者を対象にしていた。さらに、「成人」を対象とした論文では「日本語」の他に「英語」が出現するが、「年少者」を対象とした論文では「中国語」など、参加者の母語が出現する傾向が観察された。

4.2.2 *JALT Journal*に見られる特徴

複数言語使用の論文数は15本で、その「①対象の場面」で教育に関わる場面の論文は12本あった。他の3本も、第二言語の自然習得をめぐる研究や教材開発への応用を目指しており、教育との結びつきが深い研究と言える。「②使用言語」は「日本語と英語」の組み合わせがほぼ全てで、1本だけ英語での会話中にハワイ語が偶発的に出現していた。「③参加者の関係」は、「学習者同士」が5本、「学習者同士」「教師と学習者」「教師同士」を同時に見ている論文が3本、「学習者同士」と「教師と学習者」を同時に見ているものが2本、その他「家族間」「友人間」「初対面の店員と客」が各1本あった。「④参加者の属性」は「成人」が8本にのぼり、「成人と年少者」は4本、「年少者のみ」は2本、不明が1本あった。「⑤CS・TLの言及」は、TLに言及した論文はないが、CSに言及した論文が6本、「日本語への切り替え」と述べたものが1本あった。

この*JALT Journal*に掲載された複数言語使用の論文の特徴として、教室の場面が多く扱われていることに加えて、その参加者の属性に多様性が見られることが挙げられる。例えば、ひと口に「教師」と言っても、そこにはALTや教育実習生も含まれており、その傾向は他の2つの論文集には見られなかった。

4.2.3 『社会言語科学』に見られる特徴

複数言語使用の論文数21本のうち、「①対象の場面」で教育を扱った論文はわずか8本で全体の半分にも満たなかった。「②使用言語」は「日本語と英語」が4本、「日本語と韓国語」が3本、「日本語と台湾語」「日本語とスペイン語」「日本語とポルトガル語」が各1本あった。一方で、「英語と日本語」のように英語を主にした論文が4本、「マレー語と日本語」が1本あった。その他、3つ以上の言語による会話データを扱った論文として、「日本語・インドネシア語・タガログ語」「日本語・英語・ウルドゥー語」「英語・インドネシア語・中国語」「中国語・台湾語・英語」「ソウル方言・延辺方言・中国語」が各1本というように、他の論文集よりも扱われる言語の種類が多様であった。「③参加者の関係」は、学習者同士が4本、「教師と学習者」が1本で、教育以外の場面の「初対面」「知人・友人」が合計で7本などであった。「④参加者の属性」は、「成人」が14本、「年少者のみ」が5本、「成人と年少者」が2本あった。「⑤CS・TLの言及」で、

TLに言及した論文は全くなかったが、CSに言及した論文は7本あった。そのうち、学校・教室談話に着目したものは4本にとどまった。

この『社会言語科学』に掲載された複数言語使用の論文の特徴として、教室の場面が少なく、参加者の関係で、「初対面」「知人・友人」の方が「学習者同士」「教師と学習者」より多く扱われていることが挙げられる。この際、分析内容として、参加者同士のやり取りや多様な人間関係のやり取りを分析・考察する研究が少なからず見られた。

5. まとめ

本発表では、日本語教育と英語教育、また、日本語や英語を含めたやりとりに関する論考をまとめた『日本語教育』、*JALT Journal*、『社会言語科学』の3誌で会話データ分析論文を抽出し、文献調査を通じて、日本における複数言語使用をめぐる研究の動向を明らかにしてきた。その結果、当該3誌では、教育に関わる場面を対象にした研究が多く見られた。そして、細かく分析すると、研究の手法について3誌で異なる特徴が観察された。さらに、必ずしもCSやTLという術語を用いて説明してはいないものの、会話参加者の複数言語使用を観察・記述していることも見て取れた。

今回、日本語教育や英語教育を扱った論文集と「ことばと社会の関係」を軸足にした論文集における会話分析データ論文を概観することで、より学際的な視点から、TLという多言語話者による言語レパートリーの構成を分析していく基礎資料を得ることができた。しかし、TLという捉え方が定着していない中で、今後TLの実態調査を行う際に、教育現場における複数言語使用の現象をどのように捉え、意味づけていくかを検討することでTLの観点を確立させ、研究につなげる必要があるのではないかと。

TLを主眼にすることは、教育への還元を目指すことにもなる。そもそも、教育とは、社会の中で多くの時間を費やす場面であり、そこで観察された現象をTLの観点から分析していく需要は大いにある。今後は、本調査で得られた分析の手法をふまえて言語レパートリーを多面的に観察していくことで、多言語話者が持つ特徴を、参加者の関係や属性が使用言語に与える影響などから包括的に記し、教育場面の様々な文脈で実態調査を行うことで、TLに伴う参加者間の動的なやりとりを明らかにしていきたい。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 23K00704「日米大学隣接環境での複数言語使用の実態分析：語学教育への応用を目指して」(研究代表：竹田ら)の助成を受けている。

参考文献

- Bojsen, H., Daryai-Hansen, P., Holmen, A., & Risager K. (Eds.) (2023). *Translanguaging and epistemological decentring in higher education and research*. Bristol: Multilingual Matters.
- Canagarajah, S. (2011). Translanguaging in the classroom: Emerging issues for research and pedagogy. *Applied linguistics review*, 2, 1–27.
- Garcia, O., Johnson, S. I., & Seltzer K. (Eds.) (2016). *The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning*. Baltimore, MD: Brookes.
- Heltai, J. I., & Tarsoly, E. (Eds.) (2023). *Translanguaging for equal opportunities: Speaking romani at school*. Berlin: De Gruyter.
- Mazak, C. M. (2017). Introduction: Theorizing translanguaging practices in higher education. In Mazak, C. M., & Carroll, K. S. (Eds.), *Translanguaging in higher education: Beyond monolingual ideologies*, pp.1–10. Bristol: Multilingual Matters.
- 中井陽子 (2012). インターアクション能力を育てる日本語の会話教育. ひつじ書房
- 大場美和子・中井陽子・寅丸真澄 (2014). 会話データ分析を行う研究論文の年代別動向の調査—学会誌『日本語教育』の分析から—。日本語教育, 159, 46-60. <https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongokyoiku/159/0/159_46/_pdf-char/ja> (2024年1月3日)
- Shepard-Carey, L., & Tian, Z. (Eds.) (2023). *(Re)imagining translanguaging pedagogies through teacher-researcher collaboration*. Bristol: Multilingual Matters.
- Tsou, W. (2021). Translanguaging as a glocalized strategy for EMI in Asia. In Tsou, W., & Baker, W. (Eds.), *English-medium instruction translanguaging practices in Asia: Theories, frameworks and implementation in higher education*, pp. 3-17. Singapore: Springer.
- Tsou, W., & Baker, W. (Eds.) (2021). *English-medium instruction translanguaging practices in Asia: Theories, frameworks and implementation in higher education*. Singapore: Springer.
- Wei, L. (2022). Translanguaging as a political stance: Implications for English language education. *ELT Journal*, 76(2), 172-182.